

ナチドイツとソ連の収容所文学におけるたばこの詩学的機能に関する考察
A Study of the Poetic Function of Cigarettes in the Labor-Camp-Literature of Nazi Germany
and the Soviet Union

山本浩司（早稲田大学文学学術院）

YAMAMOTO Hiroshi (Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University)

1. 和文アブストラクト

マテリアルスタディーズを文学研究に応用した「事物の詩学」とリストの詩学、それに時間と空間の重なりを捉えるクロノトポス論の方法を用いて、ソ連とナチドイツの労働収容所体験の言語化の試みを読解し、たばこが果たす多角的な詩学的機能を検討した。収容所文学では、強制労働、飢餓、病や死、望郷の念などが中心的な主題となることが多いが、よく取り上げられる黒パンや薄いスープなど生命維持に関わる配給食と比べて、嗜好品たるたばこは、物々交換経済のなかで信頼性の高い基軸通貨として機能すると同時に、文字通りに紫煙となって消える儚さ、匂いによる過去の想起機能、煮出して毒性を強め自殺の手段ともなる多面性を持つことに注目した。この多面的な事物たばこが如何なる詩学的機能を果たしうるか、特にこれまで脚光を浴びることのなかったドイツ人のソ連収容所文学、それも体験世代の自伝的回想と後継世代の小説的虚構に重点を置いて検討した。

2. 英文アブストラクト

Using the methods of the "poetics of things", which applies materialist studies to literary studies, the poetics of lists and the chronotopos theory, which captures the intersection of time and space, we looked at literary attempts to come to terms with the experience of both Soviet Russian and Nazi German labor camps. Particular attention was paid to the diverse poetic function played by tobacco. In comparison to the often-mentioned life-sustaining rations such as brown bread and thin soup, Tobacco, a well-preserved luxury good, serves as a reliable reserve currency in the barter economy. At the same time, tobacco, which literally disappears as smoke, is a symbol of transience. It reminds people of the past through its smell and can also be used as a means of suicide, as it increases its toxicity when cooked. This article examines the poetic function of this multi-faceted cigarette, with a particular focus on Soviet Gulag literature by Germans who have not yet been in the spotlight. The autobiographical memories of the affected generation are compared with the fictionalized stories of the subsequent generation.

3. 研究目的

「マテリアルスタディーズ」を文学研究に応用するドイツ語圏で近年盛んな「事物の詩学」(Scholz / Vedder 2019) を足がかりにして、ナチドイツとソ連の収容所体験の言語化の営み、すなわち第一世代の自伝(ヴィーゼル、フランクフル、P・レヴィ、センブルン、R・クリューガー、ノヴァック、ケルテスら; ソルジェニーツィン、シャラーモフ、ギンズブルク、フーバー=ノイマン、ケストラー、ヴァイスベルク、W・ルーゲ)と第一世代の中でもかなり遅れてなされたドイツ語圏の取り組み(H・ビーネク、O・パスティオールら)を一方に、後継世代による21世紀のフィクション(シュリンク、H・モリス、イトウルベ; H・ミュラー、S・メンシング、E・ルーゲ、E・フンメル、H・モリスら)を他方に置いた上で、たばこが果たす他に類を見ない多角的な詩学的機能を、黒パンや具の薄いスープなど生命維持機能に限定される配給食や生理用品や出産育児用品など女囚の生理に関わる事物とも比較し、収容所文学という歴史学的心理学的社会学的に膨大に蓄積されてきた学術的資料にも当たりながら、実際の文学作品を多読して類型化していくことを試みた。それによって収容所体験のナラティブに新たなアプローチをし、可能な範囲でヒトラーとスターリンの収容所の共通点と相違点を洗い出すことを目指すとともに、収容所内代理通貨としての堅牢と嗜好品としての儂さを併せ持つたばこという事物の多面性と可変性を提示することで、遺品や大量生産品など確たる事物に関心が偏りがちな「事物の詩学」に対しても、新しい観点を提供することを目指した。

4. 研究方法

本研究の方法としては、事物としてのたばこの詩学的機能分析にあたっては、ドイツ語圏で近年盛んなマテリアルスタディーズを文学研究に学際的に応用した「事物の詩学」の手法と監獄や収容所という特殊空間の意義を考えるにあたっては、クロノトポス論(Michail Bachtin 2008 [1973])とヘテロトピア論(Michel Foucault[1967])を用いることとした。「事物の詩学」については、物語の方法論に関連づけて、起点と終点を持つコンベンショナルな小説のクロノロジーに抵抗する並列(パラタクシス)、羅列、リストの技法についての議論を参照することにした(Pastior 1994, Cotten 2008, Lentz 2013, Rakusa 2016)。その上で、作品の空間表象と事物との関わり方に注意を払って各対象作品の精読を進めることとした。ドイツ語作品の読解にあたっては、フランス、ロシア、東欧、日本など国際的なグラーグ文学にも目配りし比較文学的な視点も欠かさぬようにした(Lachmann 2019)。

その際、ドイツ語圏の代表的な図書館(ドイツ国立図書館ライプチヒ館、オーストリア国立図書館、ベルリン州立図書館、ベルリン・フンボルト大学図書館、ベルリン自由大学図書館、ウィーン大学図書館)で一次文献、二次文献の資料収集にあたった。第一

世代の記録文学が出版こそされたものの冷戦下で注目されないまま絶版となったケースが多いため一次的資料についてもスキャンすることが不可欠だった。その中で文学的質の高さで特に注目した二人の書き手ビーネクとパスティオールについては、過去を語ることに心理的な障壁が強くあったため他人にはわからない謎めいた暗号のような形で書いていることから、パスティオールの遺稿を保存するマールバッハ文学資料館とビーネクの遺稿を管理するニーダーザクセン州立図書館でも資料調査に当たった。各地で収集した資料をスキャンしてデジタル化した上で、収容所文学におけるたばこの多面的な詩学的機能を洗い出すことを試みた。それとともに、日本のシベリア抑留関係資料館（平和祈念展示資料館、舞鶴引揚記念館）やドイツの博物館（カールスホルスト・ドイツ＝ロシア博物館、ザクセンハウゼン強制収容所記念館）でナチドイツやロシアの労働キャンプから集められた圧倒的な物の集積を自分自身の目で確認することができた。

ドイツ語圏への出張では、資料館に閉じ籠るばかりではなく、ドイツ語圏の研究者たちと積極的に意見交流をするよう心がけた。ドイツ語圏で「文学とマテリアル」研究領域をリードする文学研究者（ハンブルク大学ビショフ教授、ベンティーン教授、ベルリン・フンボルト大学フェッダー教授、ギーゼン大学ヴィルト教授）や抒情詩を中心とした現代文学研究者（ベルリン自由大学フランク教授、パリ・ソルボンヌ大学バヌーン教授）、ロシア文学研究者（トリア大学シュタール教授）たちと意見交換して、本研究が国際的なレベルでの研究の質を担保できるよう努めた。

5. 研究成果

暫定的な研究成果はまず 2023 年 10 月ブルガリア国立ソフィア大学の独文科創設 100 周年記念シンポジウムにおける国際学会発表（ドイツ語）という形で発信した。この招待発表では、第一世代の二人の作家のグラグ体験に対する失語と韜晦に注目し、周囲の事物への関心の集中と羅列と並列を原理として因果律的な自伝形式の乗り越えを目指していたことを論証した（*Avantgardistische Annäherungsversuche an historisch-biografische Brüche. Über Horst Bienek und Oskar Pastiors Erinnerungsarbeit zum Gulag* [歴史的自伝的断絶へのアヴァンギャルド的接近の試み——ホルスト・ビーネクとオスカー・パスティオールのグラグ回想作業について]）。アジアから唯一招聘されたゲストとしてシンポジウムに参加し、同じ文学研究セッションで発表したベルリン・フンボルト大学フェッダー教授、ユルエンス講師、ハンブルク大学ビショフ教授、ブランデス教授、キルヒマン講師と発表の場での質疑応答にとどまらず、三日間にわたる学会開催期間中機会を見つけては議論して有益なフィードバックを得られた。本研究が「事物の詩学」という研究にも新たなインパクトを与えられることを確

信できた。発表原稿は議論を踏まえて加筆訂正した上で、ソフィア大学刊行のオープンアクセス学術誌「Germanistik und Skandinavistik」(ISSN: 2815-2867)へ2024年3月初めに寄稿済みで、現在2名の審査員による覆面査読を受けている最中である。

他に学術論文としては、「BIS ES knallt im lau|ern|den G|et|rei|de“. Grenzerfahrungen in den Collagegedichten Herta Müllers [待ち構える穀物畑で銃声がするまで ヘルタ・ミュラーのコラージュ詩における限界経験について]」をドイツで刊行された研究論集に発表した(査読付)。ヘルタ・ミュラーのコラージュという詩的原理が、コンベンショナルな物語をすり抜けつつ、ルーマニア独裁政権下の限界経験を表現するのにふさわしい形式であることを明らかにしたもので、パステイオール之死まで共同で執筆していた『息のブランコ』の創作原理を理解する上での足がかりを得ることができた。

慶應義塾大学藝文学会から正式に招待されて、ジャン・ケロールやロベール・アンテルムらフランスのナチス収容所文学の非コンベンショナルな語り方の文脈に置きつつ、ビーネクの『細胞』をケストラー、ソルジュニーツィン、ベケットの批判的受容という観点で論じた論文「遅れてきた収容所文学 H・ビーネクの小説『独房』における待機と事物の詩学」を、同会学術誌『藝文研究』に発表した。これによって、たばこの詩学的機能を問う本研究にとっての前提となるグラーグ文学の美的革新性について考えをまとめることができた。さらにビーネクがプレテキストとして参照しているアーサー・ケストラーの『日蝕』について、ドイツ語オリジナル版からの翻訳が出たのを契機に書評を書いた。詳細な書誌情報はいずれも本項末尾に掲げた通りである。

これらの研究成果によって、ホロコースト研究やグラーグ研究に対しても一定の新しい視座を提供することができた。日本語でも論文発表し成果を国内に還元することによって、これまで等閑視されていたグラーグ文学に新たな光を当て、日本で十分な研究蓄積のあるシベリア抑留者文学との関連付けのための突破口を開くことができたといえる。

(論文)

山本浩司:「遅れてきた収容所文学 H・ビーネク小説『独房』における待機と事物の詩学」慶應義塾大学藝文研究会『藝文研究』125号 2023年, 86-102頁.

Hiroshi Yamamoto: „BIS ES knallt im lau|ern|den G|et|rei|de“. Grenzerfahrungen in den Collagegedichten Herta Müllers, in: Angelika Schmitt / Henrieke Stahl (Hrsg.): Lyrik und Existenz in der Gegenwart. Berlin (Peter Lang) 2023, pp.453-463.

Hiroshi Yamamoto: Avantgardistische Annäherungsversuche an historisch-biografische Brüche. Über Horst Bienek und Oskar Pastiors Erinnerungsarbeit zum Gulag, in:

„Germanistik und Skandinavistik“ (ISSN: 2815-2867). [投稿済み]

(書評)

山本浩司：「アーサー・ケストラー『日蝕』(三修社)」図書新聞 3602号、2023年8月5日付。

(国際学会口頭発表)

Hiroshi Yamamoto: Avantgardistische Annäherungsversuche an historisch-biografische Brüche. Über Horst Bienek und Oskar Pastiors Erinnerungsarbeit zum Gulag, Jubiläumskonferenz der Fachrichtung Germanistik der St.-Kliment-Ochridski-Universität Sofia 100 Jahre Germanistik an der Universität Sofia Wege und Umwege zum Wandel. 12.10. 2023.

6. 考察

マテリアリスタディーズを文学研究に応用した「事物の詩学」と時間と空間の重なりを捉えるクロノトポス論と監獄など特異な空間を捉えるヘテロトポス論の方法を用いて、これまで脚光を浴びることのなかったドイツ人の手によるソ連の収容所(グラグ)体験の言語化の試み——体験世代の自伝的回想と後継世代の小説的虚構——を讀解して、たばこが果たす多角的な詩学的機能を検討した。その際に、ソルジェニーツィンやシャラーモフらロシア人によるグラグ文学はもとより、ケロール、アンテルム、センプルンらより広く知られる国際的なナチス強制労働収容所文学も参照しながら考察した。

強制労働収容所文学と言え、重労働、飢餓、病や死、点呼、看守の暴力、望郷の念などが中心的な主題となることは言を俟たない。食に関して言えば、よく取り上げられるのは黒パンや具のないスープという生命維持に関わる配給食とその公平な分配である。それと比べて、嗜好品たるたばこは、物々交換経済のなかで信頼性の高い通貨として機能すると同時に、文字通りに紫煙となって消える儚さと、煮出すことによって毒性を強め自殺の手段ともなる多面性のある事物となっている点で、収容所文学において抜群の詩学的機能を有していると考えられる。

主たる考察対象となるドイツ語圏のグラグ文学の特徴を言えば、国際的なナチ収容所文学やグラグ文学に比して、大幅な遅れによって特徴づけられる。この遅れは体験世代も後継世代にも当てはまる。体験世代の回想録としては、確かに、ヴァイスベルク(『魔女の饗宴』1951)やブーバー＝ノイマン(『スターリンとヒトラーの囚人として』1949)などが知られるが、53年のスターリンの死以降に解放された体験世代の少なからぬ数がグラグ体験を言語化することに困難を覚え長らく沈黙せざるをえなかった。戦後の冷戦体制下で東西ともにタブー化されたことが何よりも大きな原因である。しかも、ホロコーストが戦後ヨーロッパの規範的記憶になるなかで、ナチ

ドイツの加害責任を民族として負うドイツ人の被害体験を公然と語ることは、ホロコーストの相対化の疑惑を招きかねず、腫れ物として歴史の闇に葬られてきた。例えば解放後に東ドイツでロシア革命史やドイツ革命史の大家として名をなしたヴォルフガング・ルーゲは1930年代から55年まで極北で経験したグラークについて長く沈黙し、息子オイゲン・ルーゲがその小説『欠けゆく光の時代に』でその沈黙が家族に及ぼす暗い影響を主題化したほどだった。ヴォルフガングの回想録は2003年に編集上問題の多い版が小さな出版社から出た後、息子の編纂によってようやく2012年に日の目を見たのだった (Wolfgang Ruge 2012)。

歴史家ルーゲが伝統的な回想録の形で過去を記録したのに対して、詩を出発点とする作家ホルスト・ビーネクと詩人オスカー・パステイオールは、フィクショナルな文学作品としてグラーク体験に取り組んだ。二人とも男性同性愛者としても社会的なスティグマを受けており、彼らの文学的な試みは屈折に次ぐ屈折に印づけられ、容易な接近を許さない。それでも晩年になって二人ともグラーク体験と改めて取り組もうとした。ビーネクは『ヴォルクタ』で過去を明示的な回想録の形で残そうとするも、完成させることなく没する (Bienek 2013)。パステイオールも、ヘルタ・ミュラーの提案で二人してグラーク体験に基づく小説『息のブランコ』を書き進めるが、志なかばで亡くなり、小説のそこかしこにパステイオールの息遣いが残っているにしても、ミュラーが単独で完成させることになった (Müller 2009)。小説という形をとっているため、回想録ほど事実関係の忠実な再現とはなっていないが、それでもこのフィクションは彼のグラーク体験の内実に近づく手がかりを与えてくれるものになっている。これまで彼の作品のあちこちに明示的ならざる形で散りばめられていた言葉の破片がグラーク体験の刻印を受けていることがわかるからだ。

晩年の回想の試みから改めて彼らのそれまでの作品群を読み直せば、ビーネクは68年発表の小説『独房』までグラークというテーマに詩と夢物語の形でほぼ一貫して取り組んでいたことがわかる。しかし東ベルリンで逮捕されソ連当局管理下のポツダムの刑務所で過ごした日々に題材をとった『独房』で、つまり連行される直前の時に限定した作品でグラークにはきっぱり決着をつけ、それ以降は幼年期の失われた故郷シュレージェンの想起に集中した。一方、パステイオールは体験をリアリズムの手法でセンチメンタルに語ることを頑なに拒否し、ドイツ人詩人として唯一国際的な言語実験工房ウリポに参画するなど、一見リアリズムからかけ離れた言語実験に淫するかに見えた。ところが『息のブランコ』を通して見れば、ヘルタ・ミュラーが指摘するように、グラーク体験の痕跡が言葉の破片という形で彼の作品のそこかしこに認められるのだ。

彼ら二人に共通するのは、体験を直に書くことを避けたという点にある。確かに、収容所解放直後は二人も抒情詩であれ、シュールリアリスティックな夢物語の形式で

あれ、ぼかしつつもグラーグ体験を表現しようと試みた。しかしロシアの衛星国ルーマニアに残ったパステイオールは、再逮捕の恐れから明示的な関係が読み取れるロシア詩の原稿を破棄せざるをえなかったし、西ドイツに出国したビーネクの詩的回想の試みは期待されたほどの反響を得ることができなかった。この時に中途半端に受容されなかったのは悪いことばかりではなかった。彼らは文学的な方法を徹底的に洗練させることになったからだ。

例えばビーネクはフランスの収容所文学をめぐる議論やソルジェニーツィンらロシアの収容所文学を丁寧に読み込み、独自の物語の戦略を編み出した。『独房』では、ジャン・ケロールの『我々の中のラザロ』を参照して、「ラザロ文学にはプロットがなく、スリリングな緊張も術策もない。人物たちの動きは飛躍だらけで一貫性がない」というテーゼと「囚人が事物と取り結ぶ奇妙な親密さ」(Cayrol 1955)という観点を自作に取り込み独自に発展させた。一方、パステイオールも、自分の名前がソ連の強制連行者リストに下限の年齢で載ったがために5年の強制労働を強いられたという事実を逆手に取り、聖書における名前の羅列などの伝統を踏まえつつ、並列的な「インデックス」の中に上位付けや下位付けのヒエラルキーから自由になるチャンスを認めた。これはシンタクスの上での品詞間の序列を無効化するアナーキーな自由を意味する。つまり動詞や名詞と同等の価値付けを冠詞や感嘆詞などにも与えたのだ。いやそれどころか、単語を構成する一文字一文字の自立までもが射程に入れられたのだ(Pastior 1985)。

このように最晩年の回想の試みというフィルターを通してビーネクとパステイオールの仕事全体を振り返ってみた結果、以下のような特徴を読み取ることができた。

(1) ドイツのグラーグ文学は国際的なナチ収容所文学にもロシア語のグラーグ文学にも遅れをとった収容所文学であるがゆえに先行テキストを参照しつつそれとの差別化を図る必要があった。その結果として、文学的な手法を過度に洗練させた。(2) 独房や収容所という物資の極端な窮乏する場所を前にして、限られた数少ない事物へ過剰な関心を向けた。(3) それに連動して、文学的な手法としては、伝統的な物語の目的論的なクロノロジーを排し、並列性や同時性を重視する傾向が認められる。これは一般的な自伝的回想の定型から大きく逸脱しており、歴史的災厄について語るのに、その歴史的断絶以前と同様のコンベンショナルな物語の定型に陥る矛盾を避けるためだと考えられる。とりわけ、リストという技法については、具体詩を筆頭に、現代文学に幅広く認められるばかりか、ダニロ・キシユやボルタンスキーらホロコーストの表象というコンテクストでも重要視されており、因果律的な現実理解の傲慢を排し、人間の事物に対する優位性も問い直して、事物と対等な関係を結ぶ可能性を開く意義のあることが明らかになった。

第一世代と同様に、21世紀のドイツ語圏グラーグ小説も遅れによって規定されてい

る。歴史のタブーを破る突破口を開いたのは21世紀になって、強制連行された経験を持つ母親の下で歴史の暗い影の差す幼年期を過ごしたことに動機づけられたヘルタ・ミュラーの小説『息のブランコ』によってである。それ以降、2010年代になって複数の作品が直接間接にグラーグとの関連を示すようになった。第一世代の実験的な文学が、事物への強い執着と小説の定型を崩す強い意志を示すのに対して、21世紀のドイツ語圏のグラーグ小説は、実験的な要素を否定はしないが、ことさらに前景化させもせず、物語の中にバランスよく取り込み、読者を寄せ付けない孤高の佇まいから一線を画している。しかも歴史的な距離を取れる利点を活かして、グラーグ体験のみを単独で扱うのではなく、いくつか他の現代史上の断絶と並べて大きく20世紀を捉えるように描く傾向が認められる (Erpenbeck 2012)。ただしこれはグラーグという主題の矮小化では決してない。近視眼的になりがちな当事者の見方を、20世紀という大きな枠組みで捉え直すことで是正しているからである。このように歴史的な距離がありつつ、説得力を失わないでいるのは、グラーグ体験者のトラウマが近親者たちにまで及ぼした暗い影にフォーカスする切実さがあるからである (Eugen Ruge 2011)。他方で、ミュラーやメンシングのように、グラーグそのものにフォーカスした形で描く傾向も健在である (Müller 2009, Mensching 2018)。ただしここにも多様性が認められる。ミュラーが収容所生活に徹底的に寄り添って外部の歴史をほとんど遮断したのに対して、メンシングは世紀末ウィーンに実在した筆跡読みを主役に配して、スケール大きくエポックを捉えることにも成功した。さらにメンシングは、戦後文学のカノン (ペーター・ヴァイスの『抵抗の美学』など) をプレテクストとして意識するなど、戦後文学の乗り越えを図っている。しかしだからと言ってそれ以前のプロット重視の19世紀的な小説の伝統に安直に戻るというわけでもない。ケロールの示した事物への集中的関心は、室内装飾や身の回りの品、遺品など細部にフォーカスする傾向として現代の文学にも形を変えて引き継がれている。

このように同時代のグラーグ文学に認められる事物への関心というコンテクストのなかで、本研究の対象であるたばこはどのような詩学的機能を果たしているだろうか。強制労働、飢え、監視、不自由、私有物の剥奪に、疲労と単調な反復に規定される収容所文学にあって、ヘルタ・ミュラー『息のブランコ』の冒頭で連行される主人公が寒さ対策の衣類など持ち物リストを作るように、一般に身の回りの事物は、数が少なければ少ないほどいっそう重要な役割を果たしていると考えられる。飢えというコンテクストでは、配給される黒パンや具のないスープが収容所文学のトポスであることはよく知られている。例えば、アーカイブや資料館では、黒パンを平等に分配する緊迫の場面が再現されたりもしている。これに対して、嗜好品であるタバコはそれらといささか異なった独自性を発揮している。

たばこの扱いについても、国際的な収容所文学には一定の蓄積がある。ソルジェニ

ーツインの古典的グラーグ小説『イワン・デニーソヴィッチの一日』では、たばこは精神を集中させて考えるのに有効であるとされるばかりか、自由よりも大切とまで言われており、過酷な現実から内面性の自由へ逃れる手段として大きな意義が与えられている。ただ命令されるがまま働き与えられた乏しい糧食を食べるだけの動物的な生から離れ人間性を取り戻す可能性があるからだ。さらに火を貸し借りするという行為を通じて鵜の目鷹の目で他人の隙を見つけ食糧を奪うのが常態化する収容所社会の中で人間的交流の場が生まれるきっかけにもなっている (Solschenizyn 1962)。一方で、モスクワ裁判に取材したアーサー・ケストラーの古典『日蝕』でも、理由もなく逮捕され独房に入れられた主人公が落ち着きを取り戻し考えるために娑婆から持ち込めた貴重なたばこを吸い続けるなど、過去との回路としての役割がたばこには与えられている (Koestler 2018)。

21世紀のドイツ語圏グラーグ文学も非文学的な回想録や先行するグラーグ文学を踏襲しつつもたばこの詩学的機能の拡大に最大限の努力を払っているということができる。そこで取り上げられるたばこの詩学的機能を思いつくままに列挙すれば、

(1) たばこの葉のままであれ、紙巻たばこ製品の形であれ、乾燥している限り腐敗しない特性を活かし、たばこは収容所の物々交換経済システムのなかで基軸通貨のような役割を果たした。たとえ非喫煙者であっても、たばこを所有していれば、いざという時に必要なものと交換できた。この基軸通貨としての機能は、囚人間に限定されるものではない。収容所の当局者を買収し、生存率の高い職場を割り当てさせるのにも使われたという歴史的事実がある。

(2) たばこは、嗅ぎたばこや噛みたばこの例外はあるにしても、パイプに入れるか、もしくは薄紙に巻くかして、火をつけなければ、味わうことができないという特殊性を持つ点で、収容所にある他の事物と大きく異なる。紙巻タバコの支給もあったにしても、たばこの葉を自分の手で巻くことが多かった。その意味では、他律的な収容所の中で自律的な創造的な作業だったとも言える。この作業がなければ消費できないという限りで、たばこは(1)の通貨としての堅牢さとは矛盾する可変性も合わせ持っているということができる。

(2a) 紙たばこを消費するために必要不可欠な紙というマテリアルを通じて、コノテーションを広げていくことができるのもたばこの特徴に挙げられる。本はおろか、紙そのものの所有までも禁じられた収容所では、密かに持ち込まれ隠匿された書籍のページもたばこを巻く貴重な紙として食料などと交換することができた (Müller 2009)。これは一方で、限界状況では芸術、文化、美よりも動物的な生き延びる意志が優位を示すという芸術にとって冷酷な真実を示しているし、貴重な書籍のページが燃やされるイメージはナチスによる焚書などとも通じると考えられる。その一方で、日本のシベリア抑留者の間で「位牌の前に置いた空缶に煙草のマホルカをほぐして入

れ、それを線香代りにたい」（辺見じゅん 2020）で虜囚仲間の死を悼むという事例があったように、たばこは欠乏状態の中でさまざまな儀式を代用する役割も果たした。たばこをくわえながら巡回する看守の所在が暗闇の中で灯った微かな火によって明らかになるように、嗜好品という本来の性格を超えてたばこは不可視のものを可視化する信号機能も果たすことができる。

(3) 特異な時間。時間が厳格に管理された収容所の中でたばこ休憩は、自分を取り戻す特別な時間だった。たばこに点火してから揉み消すまでの時間は、線香花火が消えるまでの時間にも似て、労働と規律によって強制された日常の中に生まれた束の間の自由な瞬間の証となる。

(4) それとは逆に、煮出すことによってニコチン毒性を強め自殺の手段ともなる（Müller 2009）。これによって生と死の二重性の刻印をたばこという事物は帯びることになる。

(5) 男女の差が限りなく抹消され女子や年少者も重労働を課された労働収容所では、喫煙は男ばかりではなく、女も年少者もしていた。タバコは通常の世界の中で重視されるジェンダー差や年齢差が囚人たちの間では解消されていることを示す指標として機能した側面がある（Mensching 2018）。

(6) 一方で、尋問の場面では、たばこにありつけないか、せいぜい質の悪いマホルカが吸えるだけの囚人と本物の輸入物の紙巻たばこを吸える当局者の対比という形で、絶対的な権力関係が顕在化させられる。それは軍服と囚人服の対比以上に効果がある。また、尋問を描くにあたって、尋問官が間を置くのにたばこに火をつけたり、懐柔するためにたばこを差し出したりという場面が使われる（Mensching 2018）。これ自体はテレビの刑事ドラマでも使われる常套的なたばこの詩学的機能だが、同じたばこが差異の解消と差異の固定を示す機能を果たしていることには注意が必要である。また尋問に限らず、仲間内で答えに窮した時に沈黙の代わりにたばこを取り出して吸い時間を稼ぐのは新しい文学でもよく使われる（Erpenbeck 2012）ことが確認でき、たばこに代わる事物の不在を印象づけた。

(7) たばこの詩学的機能は視覚的な要素にとどまらない。エルペンベックは、ヤニで歯が茶色くなるほどのヘビースモーカーで、トロツキストと糾弾されて仲間内から消えていった詩人のことを主人公の記憶に甦らせるきっかけにたばこの匂いを使った。これはプールの無意識的記憶にも通じる文学史的奥行きを感じさせる。議論白熱するなか部屋中に立ち込める煙の雲状の塊という不定形な物の記憶も取り込んだ。匂いも煙も儂さの代表格であり、たばこがどれほど消滅と近しい関係にあるかを示す事例である（Erpenbeck 2012）。

(8) 呼吸との関係。ヘルタ・ミュラーの『息のブランコ』はカバーにギリギリまで短くなったたばこを横臥して吸う痩せこけた若い男の印象的な写真を使った。作中

で直接にたばこに言及する場面はそれほど多くはないが、本書が「息」と「呼吸」を中心的な主題にしていることを考慮すれば、喫煙がそれとのアナロジーで重要な役割を果たすことは間違いない。本書では重労働が徹底的なスローモーションとクローズアップ技法を用いることで、呼吸を整えつつ行う芸術的ダンスに読み換えられるし、コークス工場の煙を吹く老朽化した装置も同じようなアナロジーに置かれている。そして息を吸って吐く収容所の単調なリズムが崩れる瞬間が何度か取り上げられている。たばこは普段は見えない呼吸を可視化する装置としても機能している。



7. 結論

ドイツ現代グラーグ文学の分析から明らかになったのは、たばこの持つ詩学的機能の無尽蔵なまでの豊穡さである。収容所でもその前段階の監獄でも、私物が取り上げられ官給品をあてがわれる。数少ない身の回りの事物の中では、防寒着など衣服のほか、食にまつわる匙や椀などが重要な事物である。それらが資料館に収集保存されるような確固たる硬い事物であるのに対して、黒パンや塩辛い具のないスープなど回想録でも言及される定番の食料は、後に形を残さない儂い事物と言える。その儂い事物の中で、配給食が動物的生命を維持するために必要とされる必需品なのに対して、嗜好品たばこは、動物的生の維持とは異なる生の余剰部分と関わることのできる、収容所内でほとんど唯一の特別な事物となっている。食物と同じように、口を通じて味わわれるものであるにもかかわらず、刻みたばこをそのまま単純に体の中に摂取するわけではない。燃やした煙という形のないものを味わうという詩的想像力をいたく刺激する特性を持っている。しかも刻みを自分で紙に巻いて形を整え点火するという面倒な工程を経なければ、味わえない。強制された日常の中で自分自身のためだけに手間をかけるという個人的自由の獲得の瞬間として機能している。そのうえ、巻紙は書くという詩的営みと直結してもいてメタ文学的な反省を促す。

そしてもちろん喫煙による身体的に覚える快樂も強制労働の単調な反復の中に生まれる例外的な陶酔の瞬間として、それも他の人々と一緒に経験する祭儀的な瞬間として取り上げられる（「ラッキー・ストライク——が一本ずつ添えてあった。僕は二口吸ってみたが、それでもう酔ったような心地だった。頭が僕の肩からふわふわ浮き上がり、寝台の周囲をくるくる回る他の顔たちと混じり合った。」 Müller 2009）。

しかもたばこは単純に体の中に飲み込まれて消えるのではなく、吸殻として痕跡を、たとえ儂いものであっても、外に残すこともできる。いや、吐き出した煙の塊として、さらに衣服や体や髪に染みついた匂い、黄ばんだ歯として、痕跡を残せる点で、食べて終わりの食品とは大きく違った特性を有している。こうした儂い痕跡を残すたばこの

特徴は、硬い事物では考えられない詩的想像力を喚起する。

そして何よりも詩的想像力にとって重要なのは、たばこが生の歓喜と死、基軸通貨としての安定と儂さ、差異の消滅と差異の固定など、相反する矛盾した特性を合わせ持っていることである。

ドイツ語圏のグラーグ小説の歴史を振り返るなかで、強制労働収容所という限界状況の中でこそ、たばこはその多角的な詩学的機能を遺憾なく発揮できたと結論づけることができる。

8. 引用文献

Bachtin, Michail M. (2008 [1973]): Chronotopos. Frankfurt a. M.

Bienek, Horst (1968): Die Zelle. München.

Bienek, Horst (2013): Workuta. Göttingen.

Cayrol, Jean (1959 [1950]): Lazarus unter uns. Stuttgart.

Cotten, Ann (2008): Nach der Welt. Die Listen der Konkreten Poesie und ihre Folgen. Wien.

Erpenbeck, Jenny (2012): Aller Tage Abend. München.

Foucault, Michel (2013 [1967]): Die Heterotopien. Der utopische Körper. Berlin.

辺見じゅん (2020) : 収容所から来た遺書 文藝春秋。

Koestler, Arthur (2018): Sonnenfinsternis. Roman. Erstausgabe nach dem deutschen Originaltyposkript. Coesfeld.

Lachmann, Renate (2019): Lager und Literatur: Zeugnisse des GULAG. Konstanz.

Lentz, Michael (2013): Atmen Ordnung Abgrund. Frankfurter Poetikvorlesungen. Frankfurt a. M.

Mensching, Steffen (2018): Schermanns Augen. Göttingen.

Müller, Herta (1992): Der Fuchs war damals schon der Jäger. Reinbeck bei Hamburg.

Müller, Herta (2009): Atemschaukel. München.

Pastior, Oskar (1985): Ingwer und Jedoch. Texte aus diversem Anlaß. Göttingen.

Pastior, Oskar (2007): Speckturm: 12 x 5 Intonationen zu Gedichten von Charles Baudelaire.

Rakusa, Irma (2016): Listen, Litaneien, Loops – zwischen poetischer Anrufung und Inventur. München.

Ruge, Eugen (2011): In Zeiten des abnehmenden Lichts. Reinbek bei Hamburg.

Ruge, Wolfgang (2012): Gelobtes Land: Meine Jahre in Stalins Sowjetunion. Herausgegeben v. Eugen Ruge. Reinbek bei Hamburg.

Scholz, Susanne / Vedder, Ulrike (2019): Handbuch Literatur & Materielle Kultur. Berlin / Boston.

Solschenizyn, Alexander (1969 [1962]): Ein Tag im Leben des Iwan Denissowitsch. München.